
幽霊はいつも気まぐれ

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

幽霊はいつも気まぐれ

【Nコード】

N6029B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

幽霊が出るというハイウェイ。その話を聞いた隆一は軽い気持ちでそこに向かう。するとそこには。神戸等でよくあるようなお話を扱ってみました。場所のモデルは特にありません。

第一章

幽霊はいつも気まぐれ

この頃ハイウェイで奇妙な噂が流行っていた。何でも真夜中にいつも綺麗な女が立っているというのだ。

彼女は言うらしい。連れて行ってくれと。そして彼女を乗せて目的の場所に止めるともう彼女はいない。探しても何処にもいないというのだ。

「何だよ、怪談かよ」

そのハイウェイにあるファミレスでその話を聞いて竹部隆一は思わず笑ってしまった。何度も聞いたことのあるような話であったからだ。

「もつと変わったのねえのか？」

赤い髪を掻き揚げて笑ってそう言った、向かいの席にはその話をする同じゼミの仲間がいた。彼は大学生で車が趣味だ。よくドライブをしている。それでこのハイウェイも来たのである。

「それから乗せないと四つんばいになってバイク並のスピードで追いかけてくるとかよ」

「何なんだよ、それ」

彼のゼミ仲間である小塚卓也はそれを聞いて顔を顰めさせた。

「訳わかんねえぞ、それ」

「ああ、これ神戸にある話なんだ」

隆一は卓也にそう答えた。

「何かな。六甲の方に出るらしいぜ」

「怖いな、それって」

「神戸って結構そんな話が多いんだよ。何かハイウェイ絡みでな」

「へえ」

「他にもあったかな。そうそう、人面犬とかな」

話がありきたいなものになってきていた。

「それは何処にもあつただろ？」

「あつ、そうか」

「後口裂け女とかな」

二人は自分と古臭い話をはじめた。

「そんなのは何処にもあつたじゃねえか」

「それもそうか」

「そうだよ。で、その女だけねどな」

「どうせこの交通事故でもあつたんだろ？」

「よくわかつたな」

「こつした話の定番じゃねえか」

両手を頭の後ろに回して冷めた声で述べた。

「で、その成仏できねえ幽霊つてわけだろ」

「その通りさ」

「そこまで全部一緒だな。変わり映えしねえっていうか」

「けれど本当に見た奴も何人もいるらしいぞ。乗せた奴も」

「そのままホテルに連れて行けばいいんじゃないかねえのか？」

ふとそう思ってそのまま口に出した。

「よく今までそういうことする奴いなかったな」

「そういうのはすぐに見破るのかして乗らないらしいな」

「よくできたお話だねえ」

シニカルに感心してみせる。

「そういう話の定番だよな。あと暴走族追っかける首なしライダーとかか」

「そういうのもあるのか」

「あるぜ。他にも幾らでもな」

隆一は笑って言う。

「どうせここのもそういう作り話だろ。実際に見たって奴はいつもいねえんだよ」

「御前こつという話は信じないんだな」

「当たり前だろ」

口の端を歪めて笑ってきた。

「あくまでお話なんだよ。だから面白いんだ」

「じゃあ実際に今夜ここを走ってみるか？」

「ああ、いいな」

それに乗っってみせた。

「じゃあ行くか」

「おい、俺もかよ」

「どうした？」

「いや、俺はいいよ」

卓也は嫌そうな顔をしてこう言ってきた。

「そういうのはよ。ちょっと」

「恐いのかよ」

「苦手なんだよ。とにかく俺は行かないからな」

「ちえっ、面白くねえな」

隆一は顔を顰めさせた。ここまで来て何を言っているんだと思うが本人が嫌だと言ったら仕方なかった。それ以上は言うつもりはなかった。無理強いはいしない主義だ。

「じゃあ俺だけで行くからな」

「ああ」

「後で話聞かせるぜ。会えればいいな」

「期待してるぜ。じゃあ月曜に学校でな」

「楽しみにしてな」

そんなやり取りの後で店を出て車に乗ろうとする。駐車場で卓也は声をかけてきた。

「そうそう、何でも赤い車が好きらしいぜ」

「俺の車まんまじゃねえか」

それを聞くと笑みを浮かべた。彼の車は赤く塗装されている。それが夜の中でもはつきりとわかる。

「ライトバンは乗らないらしいな、しかも」

「後ろに誰かいるの警戒してるってか」

「多分な。まあ御前のだと大丈夫だな」

「ああ、俺のはな」

彼の車はスポーツカーである。バイトで無理して買ったものだ。買うまでとこれからのローンがかなり大変だが思い切って買ったものである。

「他に誰かいる心配もないしな」

「そうだな。じゃあな」

「ああ、また月曜な」

卓也に別れを告げて駐車場を出る。そしてハイウェイを進む。暫くして道にひとりぽつんと立つ影を見た。

「おやおや」

それを見て笑みを浮かべる。もう出て来たのかと思った。

「じゃあ停めるか」

車をその影の側に停めた。白いワンピースに黒く長い髪の女がそこにいた。全体的に痩せていて幽幻がする。そうしたところまで如何にもといった感じであった。

「どうしたんだい、あんた」

「乗せてくれるかしら」

女は静かな声で言った。

「その車に」

「何処までだい？」

「ハイウェイの終わりまで。いいかしら」

「ああ、いいぜ」

内心はこれからどうなるか期待しながら返事をした。どうせ偽者に決まっているから証拠を掴んで月曜に卓也に言うつもりであった。少なくとも幽霊だとは全く思っていないかった。

「横に乗りな」

「ええ」

扉を開けると横に乗ってきた。そして進みはじめた。進みながら彼女に声をかける。

「どうしてここにいるんだい？」

「ちよっと」

「ちよっと、か」

それを聞いて増々胡散臭いと思った。

「それでハイウェイの終わりまでか」

「いい？」

「だから乗せたんだよ」

隆一は笑ってこう答えた。答えながらちらりと彼女の横顔を見る。綺麗な顔だが色が白く表情に乏しい。本当に幽霊みたいな感じであった。

第二章

「まあすぐだな」

彼は言った。

「今日は道は静かだな。けれどよ」

「何？」

「こういうところはあまり出歩くものじゃないぜ」

「悪いの？」

「悪いってわけじゃないけれどな」

「じゃあいいじゃない」

「まあな」

何となく答えをはぐらかされてしまったのが面白くなかったがそれは抑えることにした。

「終わりまでだったよな」

「ええ」

「わかったよ、じゃあ行くぜ」

「お願いね」

こうして隆一は彼女を乗せて進みはじめた。運転しながら彼女に話し掛ける。

「あんた何処にいるんだい？」

「何処に住んでるかってこと？」

「そうさ、ここなのかい？」

「そうよ」

彼女は答えた。

「ここにいるの」

「そうだったのかよ」

「それがどうかしたの？」

「いや、別に」

ありきたりの返事だったがそこにこうした話にお決まりのものを

感じていた。

「ここなのか」

「そうだけれど」

「ふうん。じゃあここには詳しいのかい？」

「そのつもりだけれど」

「じゃあさ。色々この話も聞いてるよな」

彼は問うてきた。

「変な話とかな」

「そういうのは知らないわ」

女はしれつとした様子で述べた。

「興味ないから」

「そうかい」

「ええ。まあ夜出歩くのは好きだけれど」

「物騒なことで」

「最近街道レーサーっていうの？夜騒がしくなったけれどね」

「だから出歩かない方がいいぜ」

親切な言葉をかける。彼もそれ程悪い男ではないのだ。

「いいのよ。だってわかるから」

「わかる？」

「どういった人かね。勘で」

「ふうん、勘ね」

ファミレスでの卓也との話を思い出していた。そういえば幽霊つてのは人を見るとか言っていた。そのことを思い出していた。

「そうよ、勘がいいのよ」

「じゃあ俺は大丈夫なのか」

「そう思ったからお願ひしたのだけれど」

「俺が紳士だからか？生憎だけれど遊び人だぜ」

「じゃあこのままホテルにでも消えるの？丁度そこにあるわよ」

左手を指し示す。見ればこうしたハイウェイにはよくある洒落た外観と看板のホテルが一つあった。左手は山、右手は海となってい

るのでかなり見晴らしがいいホテルである。

「遊び人だったらすぐに行くわよね、そのまま」

「いや、止めとくよ」

だが隆一はその言葉には乗らなかった。

「気分じゃないからな」

「そうなの」

「がっかりしたかい？」

「いえ」

それには首を横に振った。振ると髪まで揺れてそれが月明かりを跳ね返していた。

「だったらそれでいいわ」

「淡白だね、どうも」

「それはそれで終わりまですぐ行けるから」

何か達観した感じの口調であった。

「それをお願いするわ」

「じゃあそうさせてもらうぜ」

「ええ」

こうして寄り道もなくハイウェイを進む。かなり飛ばしたせいで一時間程でゴールに到着したのであった。

「よし」

ドライブインの中に入って停めた。

「これでいいな。さて」

彼女の方を振り向く。すると。

「!？」

何とそこには誰もいない。開けられた扉があるだけであった。

「おい、マジかよ」

それを見て思わず声をあげた。そして車を飛び出る。

辺りを探し回る。だが姿は見えずであった。

何処にもいない。本当に幽霊だったのか。そう思いはじめた。

「まさか、な」

幽霊はいつも気まぐれ

あいつの言ったことは本当だったのか！？心の中で警報めいた鼓動が鳴るのがわかる。それでも辺りを探し回っていた。その時であった。

第三章

「どうしたの？」

「どうしたのってな」

その声に応える。

「今まで乗せていたツレがな」

「ええ」

「いなくなっただよ、急に」

「急になのね」

「やっぱりよ、あの話は本当だったんだ」

声の方を振り向かずに関心の中に入って言う。

「あの話？」

「知らないのかよ、幽霊だったんだよ」

「幽霊」

「そうだよ、ここにはそんな話があるらしいんだ」

彼は言う。

「まさかよ、信じていなかったけれどよ」

「じゃあその幽霊って」

「それはな」

ここで振り向いた。

「えっ!？」

そこにはさっきの女がいた。何時の間にかそこにいたのであった。

「あれ、あんた」

「ちょっとトイレに行っていたのだけれど」

「そうだったのかよ」

「言わなかったかしら」

「悪い、聞いてなかった」

聞き落としてしまっていた。やはり幽霊のことばかり考えてしまっていたようである。

「済まない」

「いいけれど。幽霊なのね」

「ああ」

彼は答える。

「ここに出るのね」

「そうだけれど。知らなかったのかよ」

「よかったら詳しい話聞かせて」

「ああ、わかったよ」

彼はそれに応じた。

「じゃあここじゃ何だから」

ドライブインの中を指差した。

「コーヒーでも飲みながらな」

「ええ」

二人はドライブインの中に入った。その窓側の席で向かい合って座り話をはじめたのであった。

「そう、そんな話だったの」

女はそれを聞いて静かに頷いていた。

「知らなかったわ」

「つて地元なんじゃ」

隆一はその言葉に眉を顰めさせた。

「だからそういう話興味ないし」

「だから知らなかったのかい？」

「ええ」

女はこくりと頷いた。

「あつ、私の名前だけれどね」

「ああ」

「石黒小夜っていうのよ」

「石黒さんね」

「ええ、そう呼んでくれていいわ」

「じゃあ石黒さん」

隆一は彼女の名前を呼んで尋ねた。

「何であそこにいたの？」

「探し物してたのよ」

「探し物？」

「帽子を落として。けれどなくて」

「帽子を」

少し目を顰めさせて言った。

「お昼にあそこまで出て景色眺めていたのよ。その時風でね」

「帽子が落ちたんだね」

「そうなのよ。それで」

「探していたと」

「なかったから。諦めて帰ろうと思って」

くすりと笑って述べる。話してみるとどうとどうということはないことであつた。

「家この辺りなんだ」

「ここから少し歩いたところよ。そこに住宅地があつて」

「へえ」

住宅地があるというのものはじめて聞いた。意外と開けている場所であるようだ。

「そこにいるのよ。駅もあるしね」

「何だ、街と近いのか。ここ」

「そうよ。知らなかったの？」

「いや、地元じゃないから」

隆一は答えた。

「そういうのはさ。知らなかったんだ」

「そうなの」

「で、あそこでヒッチハイクして戻るつもりだったんだね」

「そうよ。行きはバスだったけれどもうないから」

「遅いからね」

「親には携帯で電話してあつたけれど。それでもこのままだと」

「で、俺の車に乗ったと」
「そういうこと」

小夜は頷く。

「御免なさいね、利用して」

「いや、それはいいけれどさ」

隆一は言う。

「本当に幽霊かと思ったよ」

「そう見えたの？」

「それ以外に見えなかったよ」

こう返した。

「ましてや話聞いた後だったし」

「けれど脚はあるわよ」

「まあな」

隆一は幽霊にも脚がある場合があるのを実は知らない。そこまでは詳しくはないのである。

「それで帽子はどうするの？」

「仕方ないから諦めるわ」

顔が苦笑いになった。

「もう見つからないから」

「そう」

「残念だけれどね」

「このまま家に帰るんだね」

「そうよ。ああ、御礼だけれど」

「うん」

「このコーヒー代おごらせて。それでいいわよね」

「ええ、それでいいぜ」

話が呆気ないオチだったのでいささか拍子抜けしていたのでそれに何もなく頷いた。それでコーヒー代を払ってもらって小夜と別れた。結局何もいままドライブインを後にしたのであった。

第四章

「何もなしだったのかよ」

「ああ」

隆一はレストランで待ち合わせした卓也にそう答えた。

「それだけだぜ」

「何だ、面白くねえな」

「そんなものだけ、幽霊の正体なんてな」

隆一は笑ってそう述べた。今はハンバーグを食べている。

「幽霊の正体見たりとか言っただろ」

「まあな」

「そういうことさ。で、御前は見たのかい？」

「いや」

卓也もそれには首を横に振った。

「全然。車とバイク以外何も見なかったぜ」

「だろ？やっぱりそんなのいねえって」

「ここはそうだったけれどよ」

「まだいるって言うのか？」

「………悪いかよ」

惘然としてそう返す。

「いないって完全にわかったわけじゃねえだろ」

「諦めが悪いな、御前も」

「ふん」

惘然とした顔でまた返す。

「まあいいさ。ところでな」

「何だ？」

「御前そのスパゲティ美味いか？」

見れば卓也はミートソースを食べていた。量は結構あり皿がかなり大きい。

「ああ、いけるぜ」
「そうか、じゃあ今度はそれ頼もうかな」
「おいおい、まだ食うのかよ」
「ドライブインじゃコーヒーだけだったからな」
「それでか」
「御前はもういいのかよ」
「そう尋ねる。すぐに返事が返ってきた。」
「さっきサンドイッチ食ったしな。別にいいぜ」
「そうか」
「じゃあスパゲティ頼むのか？」
「ああ、美味そうだしな」
「そう述べてテーブルの上のボタンを押した。そしてウェイトレスを呼びそのスパゲティを頼むのであった。」
「可愛らしい服と顔のウェイトレスに運ばれてきたそのスパゲティは確かに美味かった。それを食べ終えてサービスの紅茶を飲んだところで二人は店を後にした。」
「もうすぐ朝だな」
「ああ、段々空が明るくなってきてるぜ」
「一緒に店を出た卓也が空を見ていた。」
「帰るか。帰ったらどうする？」
「俺か？もう寝る」
「寝るのかよ」
「御前はどうするんだよ」
「俺も寝ようかな」
「だが彼も同じ考えになっていた。」
「何か疲れたしな」
「そうか、じゃあ戻るか」
「そうだな。……んっ!？」
「どうした？」
「いや、あれ」

ここで隆一は駐車場の出口に立つ一人の若い女を見た。

「あれ」

「あれってよお」

「まさかな」

二人は心の中の言葉を必死に打ち消そうとしていた。

「いないんだよな」

隆一は言った。

「だってよ、俺が夜に送ったからよ」

見れば顔が違う。服は似た感じだが。

「おい、こつち見てるぜ」

卓也が言う。

「どうするよ」

「知るか、幽霊なんていないんだよ」

半ばムキになって否定する。

「だからよ、帰るぜ」

「そうだな、とりあえず帰るか」

「ああ、それで寝る」

「わかった、じゃあ行くか」

「ああ」

そこで女を見た。まあ点いている電灯には影が浮かび上がる筈である。しかし。

影がないような気がした。隆一も卓也もそれを見た。だがそれは見えなかったことにした。

「行くぜ」

女を振り払うかのように車を出した。駐車場を出る時に彼女がずっとこちらを見ているように思えたし何か手招きをしているのも見えたがそれは見えないふりをした。自分自身に対して幽霊なぞいない、夜のあれが本当なんだと言い聞かせながら駐車場を後にしたのであった。

幽霊はいつも気まぐれ

幽霊はいつも気まぐれ

完

2006・10・19

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6029b/>

幽霊はいつも気まぐれ

2008年11月7日08時26分発行